

時と前髪 — 「二人の美しい若者の肖像画に」の一解釈

大野 隆

G. M.ホプキンスの 1886 年の未完詩「二人の美しい若者の肖像画に」('On the Portrait of Two Beautiful Young People: A Brother and Sister'¹, 以下 'On the Portrait' と記す) には, ジョン・ミルトンの *Paradise Lost*² (以下 *PL* と記す) からの影響があることは, ミルワードとショーダー (Milward and Shoder) やマッケンジー (Mackenzie) などによって既に指摘されている³。確かに両作品には同じ語彙が散見され, *PL* の第四巻のアダムとイブの失樂園前の描写をホプキンスが脚色したもの, と考えられる。

157

On the Portrait of Two Beautiful
Young People
A Brother and Sister

O I Admire and sorrow! The heart's eye grieves
Discovering you, dark trampers, tyrant years.
A juice ride rich through bluebells, in vine leaves,
And beauty's dearest veriest vein is tears.

Happy the father, mother of these! Too fast:
Not that, but thus far, all with frailty, blest
In one fair fall; but for time's aftercast,
Creatures all heft, hope, hazard, interest.

And are they thus? The fine, the fingering beams
Their young delightful hour do feature down
That fledted else like day-dissolvèd dreams

Or ringlet-race on burling Barrow brown.

She leans on him with such contentment fond
 As well the sister sits, would well the wife;
 His looks, the soul's own letters, see beyond,
 Gaze on, and fall directly forth on life.

But ah, bright forelock, cluster that you are
 Of favoured make and mind and health and youth,
 Where lies your landmark, seamark, or soul's star?
 There's none but truth can stead you. Christ is truth.

There's none but good can bé good, both for you
 And what sways with you, maybe this sweet maid;
 None good but God—a warning wavèd to
 One once that was found wanting when Good weighed.

Man lives that list, that leaning in the will
 No wisdom can forecast by gauge or guess,
 The selfless self of self, most strange, most still,
 Fast furled and all foredrawn to No or Yes.

Your feast of; that most in you earnest eye
 May but call on your banes to more carouse.
 Worst will be the best. What worm was here, we cry,
 To have havoc-pocked so, see, the hung-heavenward
 boughs?

Enough: corruption was the world's first woe.
 What need I strain my heart beyond my ken?
 O but I bear my burning witness though
 Against the wild and wonton work of men.

.

157

ふたりの美しい若者たちの肖像に

兄と妹

ああ わたしは賞賛し、悲しむ。心の目は嘆く
暗く踏みつぶす者たち、専制君主歲月よ、お前たちを発見して。
液がイトシジャンを通り抜け、つたの葉の中で豊かに浮かぶが、
涙こそ 一番いとおしくこの上なく好ましからぬ美の水脈だ。

この若者たちの父母は幸せだ！ 早すぎる―
そうではなく、今までのところでは、全くもろいまま、祝福され
美しく墮落している。だが、後の運を期待して、
被造物はみな手で量り、何か起こると期待し、
一か八かやってみては、関心を引く。

だから彼らはこんな風なのか。この見事な、このまさぐる光線は、
昼の光に溶かされた夢とか、
節玉を取るように渦を飲みこむ褐色のパロー川の上の巻き毛の早瀬のように、
さもなければ素早く流れ去ったはずの彼らの嬉々とした青春の時を
現に呼び物にする。

彼女はこのように愚かにも満足して彼に寄りかかる
妹がうまく姿勢を取るように、妻ならうまくそういう姿勢を取るように―
魂自身の手紙である彼のまなざしは、かなたを見、
凝視し、直接人生に落ちる。

だが、ああ、お前という恵まれた造りと精神と健康と若さを持つ
輝く前髪、房がないなら、
その陸標、航海目標、あるいは魂の星がどこにあるのか。
お前に役立つのは真理以外にはない。キリストは真理だ。

善以外の何も善でありうるものはない、お前にも
お前とともに揺れる者、たぶんこの美しい娘にとっても―
神以外誰も善ではありえない―それは、善の重さが量られた時
ひとたびそれが欠けていると気付かされた者に、手を振って示された警告だ。

人間は意志の中のあの傾き、あの傾向を生きる
 いかなる知恵も計器とか推量では予測できないものを、
 最も不思議で、最も静かな、
 しっかり巻かれ、前もって然りか否に引き寄せられた
 自己の中の無私の自己を。

お前の宴のことだ—お前の中のあの一番真面目な目は
 お前の毒にもっと飲み騒いでくれとひとえに求めるかもしれない。
 最悪は最善を望む。なんとこの虫がここにいたのだ、とわれわれは声をあげて泣く、
 ごらん、垂れさがり天を向くこの枝に
 このように荒廢のあばたを作ったとは、と。

もういい。墮落はこの世界の最初の不幸だった。
 私は自分の理解できないことでどれだけ自分の心を張りつめねばならないのか。
 ああ だが私はただ心を燃やし
 人々の野蛮で無慈悲は行為の証人となるだけだ。

.

I

ミルトンの *PL* のテーマは、「幸運な墮落」(felix culpa) だった。サタンは神の祝福を受けたアダムとイブの樂園での暮らしを嫉妬し、二人を墮落させようと、陰謀を企てる。アダムとイブの墮落は、キリストの贖いの業による救済に道を拓く。ではホプキンズは、この晩年の未完詩でミルトンと同じようなモチーフを用いて何を描こうとしたのだろうか。

ホプキンズも、「幸運な墮落」や人祖の墮落とキリストの贖いについて、彼自身の説明を加えている⁴。また、本未完詩 'On the Portrait' の第2連の一節、「ある美しい墮落の内に祝福されて」(blest/ In one fair fall) には、明白に「幸運な墮落」の思想が描かれている。

ホプキンズの肖像画の中の少年の視線の動きは fall という動詞で示される。この fall には「落ちる」という物理的な意味だけでなく「墮落する」という意味がある。また、草稿の段階では fall は、gaze との間で選択が迷われた⁵。ミルトンは *PL* の中でサタンのまなざしを「凝視」(gaze) という語で表現した⁶。このまなざしはホプキンズが特に警戒したもので、1855年のソネット 'To what serves Mortal Beauty?' では「一瞥」(a glance) と区別され、この世の危険な美に人を愛着させる視覚行為として警戒される。肖像画の少年のまなざしには、ミルトンの悪魔のまなざしがあり、すでに墮落への傾向を

示唆している。

肖像画の中の少女は、少年に「もたれる」(leans, st. 4)。それは満足のしぐさだが、それは「愚かしい」(fond, st. 4)ものと眺められている。この点も *PL* の中で「たとえ幸福でも、こうも防備が悪ければ長続きするはずがない」⁷ (so happy ill secured/ Long to continue…) [iv, 370] と表現された自己満足的で危ういイブの幸せと同じ意味合いを持つ描写である。少女は時の流れの中で少年とともに「揺れる」(sways, st.6)。少女の安寧はすでに失われ始めていることがわかる。

肖像画には最後に「枝」(boughs, st. 8)が描かれる。この枝は hung という過去分詞で形容されている。その原型の hang には「人の首を吊るす」という意味がある。枝は「絞首刑にされて」(hung) 死んでいる。1880年の 'Spring and Fall' で、人間という木が「立ち枯れ病」(blight)に罹っているように、この肖像画の枝も、病におかされている。

この枝には、さらに「虫」(worm)がついている。

What worm was here, we cry,
To have havoc-pocked so, see, the hung-heavenward
boughs?

なんという虫がここにいたのだ、とわれわれは声をあげて泣く、
ごらん、垂れさがり天を向くこの枝に
このように荒廃のあばたをこのように作ったとは、と。

被造物をむしばむ「虫」(worm)とは何か。虫は、一般に「求めざる闖入者」⁸であるとともに、木をむしばむ原因であり、木が枯渇するという不幸を招く。マンフレート・ルルカーは、象徴言語としては虫と蛇とは、置き換え可能だ、と述べる⁹。*PL*では、蛇は聖書の通り、悪魔の化身である。'On the Portrait'でも同じ意味合いがある。

'On the Portrait'の草稿には、肖像画の少年のことが描かれている。そこには、厳格な倫理的判断が垣間見られる。

Rise he would not; fell
Rather: he wore that millstone you wear, walth.

彼は復活しないだろう—墮落したのだ
むしろ—お前がまとうあのひき臼、富をまとったのだ¹⁰。

草稿の段階では、肖像画の少年はマルコ9章42節に登場する「キリストを信じる小さな者たちをつまずかせる者」として扱われる。彼は、ひき臼を首にかけられ、海に投げ込まれたほうがまだ、とキリストに叱責される者とみなされる。

'On the Portrait' 最終稿の第6連の 'None good but God' という言葉は、さらに、「マルコによる福音」10章に登場する金持ちの青年に対し、キリストが投げかけた言葉である¹¹。肖像画の若者たちは、この金持ちの青年のように、富を蓄えたために、たとえ神の律法を守っても天国には入れないことが示唆される。

Wreck 第21連の、

but thou art above, thou Orion of light;
Thy unchallenging poisoning palms were weighing the worth,
Thou martyr-master:

だが光のオリオンよ、あなたは頭上にある。
殉教者の主よ、あなたの内陣のない揺れる手のひらは
その価値を量っていたのだ。

という描写の中では、「殉教者の主」キリストがその両の手のひらで死者の生前の行いの価値を量った。'On the Portrait' の第6連でも、"when good weighed"（「善が量られるとき」）と同じ weigh という動詞が用いられているので、*Wreck* に示唆されたような最後の審判の場面が想定されていることがわかる。また "wave a last good-bye"（「手をふってさよならの挨拶をする」）という別れの挨拶の表現も、意識されていると考えられる。最終稿に於いても、肖像画の若者たちへの「警告」(a warning) は、墮獄と永遠の命の喪失という深刻な内容を告げるものだ。

II

なぜこのように深刻な墮落へと、この肖像画の若者たちは誘い込まれたのか。この問いへのヒントは、肖像画の少年の髪描写にある。

PL ではアダムとイブの髪が、二人の個性を示唆する「ヒヤシンスのような」(hyacinthine) という形容詞、そして「つたがその巻き毛を巻くように」(As the vine curls her tendrils) という直喩で表現された¹²。'On the Portrait' の第5連でも、少年は<前髪>に喩えられ、呼びかけられる。

But ah, bright forelock, cluster that you are

Of favoured make and mind and health and youth,
Where lies your landmark, seamar, or soul's star?

だが、ああ、おまえという恵まれた造りと精神と健康と若さのを持つ
輝く前髪、房がないなら、
その陸標、航海目標、あるいは魂の星がどこにあるのか。

少年の前髪という〈部分〉は、少年〈全体〉を表すものだ。「髪の毛はその人の特性を霊的に凝縮し、その個性を象徴する」とジャン・シュヴァリエらが見る通りである¹³。若者の前髪は、若者の美しく健康な存在を象徴するものとして、「魂の星」(soul's star)と称えられる。それは「神の意志を示すもの、道しるべ」である¹⁴。

この詩の描写の中には、確かに若い豊穡な髪への連想が描きこまれた箇所がある。それは第3連のバロー川の描写である。

The fine, the fingering beams
Their young delightful hour do feature down
That fleeted else like day-dissolved dreams
Or ringlet-race on the burling Barrow brown.

この見事な、このまさぐる光線は、
昼の光によって溶かされた夢とか、
節玉を取るように渦を飲み込む褐色の塚の上の巻き毛の早瀬のように、
さもなければ素早く流れ去ったはずの嬉々とした青春の時を
現に呼び物にする。

この描写は、Barrow という単語の語頭の B を小文字に変えれば、そのまま、髪の描写となる。「輝き」(beams)、「巻き毛」(ringlet) は明らかに髪の連想があり、「塚」(barrow) には、うねる髪の「盛り上がり」の連想がある。〈川〉の描写の中に〈髪〉の連想が込められたもの、と考えられる。若者の髪の美しさへの愛着がこの描写には込められている。

'On the Portrait' では、しかしながら、若者たちの美しさを称賛するのとは、逆の事態も意識されている。それは、詩に表れた時に関する見方と関係がある。この点に関して、ホプキンズの時についての見方を概観してみたい。

1877年の 'The Sea and the Skylark' では、被造物に及ぶ時の力は、人の行いを通し

て、「青春のころに大地が過去にもっていたあの快活さと魅力」(that cheer and charm of earth's past prime) を失わせる、と述べられた。1877年の 'God's Grandeur' でも、神の威光を感じることができなくなったのは、「世代」(generations) が大地を「踏みつけに踏みつけた」(have trod, have trod, have trod) せいだ、と語られた。'On the Portrait' の冒頭でも、語り手の悲しみは、被造物への<時>の侵入に気付くところから始まる。「歳月」(years) という<時>が、「暗く踏み潰す者」(dark trampling) として描かれ、「専制君主の」(tyrant) という形容詞まで冠されている。

被造物の内部には、しかしながら、時の流れに打ち勝つものがある。それは、ミルワードとショーダーが指摘するように、1877年の'Spring'に示唆された「エデンの園で/ 世の初めに大地の美しい存在に溢れた子孫」(A strain of the earth's sweet being in the beginning/ In Eden garden) という存在である¹⁵。'Spring' では、この「子孫」(strain) は、「精髓」(juice) とも言い換えられる。

What is all this juice and all this joy?

A strain of the earth's sweet being in the beginning
In Eden garden.

この精髓、この歓喜はいったい何なのだ。

初めにエデンの園にあった大地のあの美しい存在の子孫だ。

この原初の「精髓」は、1877年の'Spring' では、さらに、「少女や少年の無垢な心」(Innocent mind . . . in girl and boy) と同格として it で描かれる。

Have, get, before it cloy,

Before it cloud, Christ, lord, and sour with sinning,
Innocent mind and Mayday in girl and boy,
Most, O maid's child, thy choice and worthy the winning.

持ち、手に入れよ、罪でそれに飽きが来て

それが曇るまえに、キリストよ、主よ、そして酸くなる前に、
少女や少年の無垢な心と五月の日を、
ああ 乙女の子よ、あなたが選ぶ、最も得るに値するものを。

この「精髓」(juice)は、被造物の内部を流れる原初の力を描写する語として、'On the Portrait'の冒頭でも用いられる。

A juice ride rich through bluebells, in vine leaves. . .

液がイトシジャンを通り抜け、つたの葉の中に豊かに浮かぶ

植物の葉脈を流れる「液」は「精髓」という意味でもある juice という語で表現される。

1878年の *The Wreck* の第6連で神の力は、ride という動詞により、「川の流れるに乘るように時の流れに乘る」(rides time like riding a river)と、描かれる。原初の「精髓」(juice)の被造物内での動きは、'On the Portrait'では、この神の力と同様、ride という動詞で表現される。少年と少女という存在の精華は、バロー川によって象徴される時の川の上を流れる。

'On the Portrait'に描かれた二人の若者たちの青春の時間は、しかしながら、泡沫として時の川に飲み込まれる。

And are they thus? The fine, the fingering beams
Their young delightful hour do feature down
That fleeted else like day-dissolvèd dreams
Or ringlet-race on burling Barrow brown.

だから彼らはこんなふうなのか？ この見事な、このまさぐる光線は、
昼の光によって溶かされた夢とか、
節玉を取って仕上げをする褐色のバロー川の上の巻き毛の早瀬のように、
さもなければ素早く流れ去った彼らの嬉々とした青春の日々の時を
現に呼び物にする。

若者たちの青春の日々を乗せた時の激流は「節玉をとって仕上げをする (burl)」という行為をする。この激流は「巻き毛の疾走」(ringlet-race)として描かれた褐色の川の渦、という「節玉」を取る、すなわち、この渦を消し去り、死へと葬りさる。若者たちの嬉々とした青春の時間も、1881年の 'Inversnaid' の川と同じように、<泡沫>として死の淵と化した時の流れに飲み込まれる。

昼の光は、一方、このような若者たちの美しさを「呼び物にし」(feature down)、わざと目立たせる。昼の光のこの行為は、時の激流「へ反対する」(down on)行為でもある。なぜなら、呼び物にし、目立たせるとは、その存在に対して時が行う悪事を明るみに

出す行為だからだ。

'On the Portrait' では、若者の前髪的美しさが強調されるが、「前髪」(forelock) という語は、'take time by the forelock' という諺を容易に連想させる。時は、通常、前頭部だけ毛をはやした形で描かれる。若者の前髪的美しさへの強調は、若者がすでに時の化身と化していることを、皮肉にも示している。

語り手によれば、墮落した被造物はすべて、もはや訪れることのない「時のサイの再度の一振り」を求めて」(for time's aftercast)「持ち上げて重さを量り、期待し、敢えてやってみて、他の注意を引く」(heft, hope, hazard, interest)。時の化身と化した若者は、自分を支配する時をもはや客観視できず、その本質を知ることもない。彼は、時の支配に無自覚なまま、愚行を犯し続ける。

III

この若者たちの青春の「宴」(feast) と、その罪については、その裁定がすでに下されている¹⁶。

Man lives that list, that leaning in the will
No wisdom can forecast by gauge or guess,
The selfless self of self, most strange, most still,
Fast furred and all foredrawn to No or Yes.

人間は意志の中のあの傾き、あの傾向を生きる
いかなる知恵も計器とか推量では予測できないものを、
最も不思議で、最も静かな、
しっかり巻かれ、前もって然りか否に引き寄せられた
自己の中の無私の自己を。

と深奥の「無私の自己」(the selfless self of self)である神の側での、その「是非」(Yes or No)についての裁定が、すでに下されている、と語り手は見る。

若者たちの浮かれ騒ぎが、されるがままになることを、さらに語り手は願う。

that most in you earnest eye
May but call on your banes to more carouse.
Worst will the best.

おまえの中で一番真面目な目は
おまえの毒にもっと飲み騒いでくれとひとえに求めるかもしれない。
最悪は最善を望む。

ただひとつ、若者の内にある「一番真面目な目」(most...earnest eye) だけはこの事態を静観する。この「目」とは、すでに詩の初めに描かれていた「心の目」(The heart's eye) のことだ。

O I admire and sorrow ! The heart's eye grieves
Discovering you, dark trampling, tyrant years.

ああ わたしは賞賛し、悲しむ。 心の目は嘆く
おまえたち、暗く踏み潰す者たち、専制君主歳月を発見して。

心の目は、詩の冒頭で、この肖像画の中に、二人の美しい若者たちという時の化身―「暗く踏み潰す者たち、専制君主歳月」―を見てその美しさに感動するが同時に、その墮落した有様をすでに悲しんでいた。

同じ心の目は、詩の末尾で最悪を望む。終末を願う思想は、1885年頃の 'Spelt from Sibyl's Leaves' にも見られる。人生という布をほどき、黒と白、正と邪の二つの群れに分かれるままにし、と詩の語り手は述べる。それは『ヨハネの黙示録』22章11節の「不正を行うものは、なお不正を行わせ、穢れたものは、なおけがれるままにしておけ。」という天使の言葉と同じ内容だ。人間たちの墮落に対し、神の最後の審判を待つ黙示録の筆者と同じ思いが、「最悪は最善を望む」という言葉の前提にはある¹⁷。

詩の末尾近くで、詩の語り手は、

What need I strain my heart *beyond* my ken?
(イタリック筆者)

私は自分の理解できないことでどれだけ自分の心を張りつめねばならないのか。

と語る。この心の動きは、肖像画の中の少年のまなざしの描写

His looks, the soul's own letters, see *beyond*,
Gaze on, and fall directly forth on life. (イタリック筆者)

魂自身の手紙である彼のまなざしは、彼方を見、
凝視し、直接人生に落ちる。

と、同じ beyond という語を介して照応し合う。語り手は、肖像画の中の少年が自分紛いの存在であることに気付いている。しかも彼は、若者たちの美と墮落とを賞賛し、悲しむことで、

but I bear my burning witness though
Against the wild and wanton work of men.

だがわたしはただ心を燃やし
人間の野蛮でみだらな行為の証人となるだけだ。

と、彼らの痛烈な批評家であることを自ら証する。他者への批判は、自分自身へも向かう。語り手は、絵の中の少年に、墮落し、救済しがたい被造物のひとつとして、自分紛いの存在を見ることを示唆する。

'On the Portrait' で描かれた墮獄の運命を背負う人物は、1885年ごろの 'I wake and feel' にも登場する。詩の語り手は、自分を「胆汁」(gall)、「胸焼け」(heartburn) に喩え、その酸っぱさの原因を自分に帰し、その状況が墮獄者のそれと似ている、と述べる。

Selfeaste of spirit a dull dough sours, I see
The lost are like this, and their scourge to be
As I am mine, their sweating selves;

霊の自己酵母をひとつの不活発な練粉が酸っぱくする。私にはわかる
墮獄者がこんな風で、彼らのむちは私がそうであるように
彼らの汗する自我なのだ—

胆汁や胸焼けの酸っぱさとは、罪の味を意味する。このソネットでは、語り手自身は自分が墮獄者のようだ、とはっきり述べる。'On the Portrait' でも、墮獄者としての自己認識が、明確ではないが示唆されている。

最晩年の1889年に書かれた 'Thou art indeed just, Lord' では、語り手は川岸や藪の草の繁殖力を悪人の繁栄に喩える。

Oh, the sots and thralls of lust

Do in spare hours more thrive than I that spend,

Sir, life upon thy cause. See, banks and brakes

Now, leavèd how thick! lacèd they are again

With fretty chervil, look . . .

ああ、飲んだくれや色欲の奴隷たちは、
あり余る時間の中で栄えるのです。命を費やす私以上に、

神よ、あなたのために。ご覧ください。土手や茂みは今
なんとおびただしい葉でおおわれていることか。ほら、それらにはまた、
むずかるシャクの花がレース編みになっています。

この際、語り手には、自分が繁殖力のある草、繁栄する悪人のひとりのようにも見える。
自分が悪人<草>ではなく、<木>という別の存在であるのかは、不明なままだ。彼は自
分を<鳥>に喩えようとするが、それができず、根を持つ<植物>に喩える。

birds build—but not I build; no, but strain,
Time's eunuch, and not breed one work that wakes.
Mine, O thou lord of life, send my roots rain.

鳥たちは巣を作ります—でも私は作りません。そうではなく、骨折るものの、
時に去勢され、ひとつの仕事も孵し、目覚めさせることがないのです。
私の神、おお、命の主よ、私の根に雨を送ってください。

この植物は、草とは別の<木>のような存在かもしれないが、悪人<草>である可能性も
ある。'On the Portrait' でも、語り手は、肖像画中の若者を墮獄者と見、自分がその若
者紛いの者であることも示唆するに留まる。最晩年のホプキンズにとって自己は、墮獄者
のようにも見える。

結論

概して、1886年の未完詩 'On the Portrait' は、ジョン・ミルトンの *PL* のアダムと
イブ、サタンという登場人物が、二人の若く美しい男女、「虫」の形で設定されている。
二人は聖書の「金持ちの青年」のように地獄に落ちる運命が決まっている。若者は、すで

にミルトンのサタンの眼差しを持っている。若者の前髪は、また彼がすでに専制君主である時の化身と化していることを示唆する。若者たちを象徴する枝には「虫」が付き、それらは天を志向しているものの、すでに死滅している。これらに気付く語り手は、詩の初めで、彼らの容姿の美しさに感嘆するとともに、彼らの墮獄の運命を嘆く。彼は、詩の末尾で、若者たちのしたいままにさせることを願う。この詩では、肖像画の中の一見墮落してはいない若者たちの姿に、深刻な墮落の様相が垣間見られている。また若者のひとりが語り手紛いの人物であることが最後に示唆される。

ホプキンスが1882年頃、リバプールでイグナチオ・ロヨラの『霊操』についての注釈のひとつ、「地獄についての瞑想」を書いたが、その内容が彼の「暗いソネット群」と関係がある、という指摘がある。イメージの上での関連は確かにある。同じころに書かれた 'On the Portrait' にも、イグナチオの『霊操』の地獄部分への影響があることは否定できない。だが、それだけでは、彼の「暗いソネット群」を支配する心性を把握した、とは言えないだろう。

T. S. エリオットが改宗前に書いた1930年の『灰の水曜日』では、墮獄者を示唆する "the lost heart" (「失われた心」) が、その第4部で登場する。エリオットはダンテに心酔していた。『灰の水曜日』は、ダンテがウェルギリウスに導かれ、行なった「地獄巡り」のテーマをエリオットが真似て描いたものだ、と見ることも可能だ。ホプキンスは、エリオットより50年近く前に、自分の「暗いソネット群」で神曲の『地獄篇』のようなソネット群を描き、同じ時期の未完詩にも、その心性の片鱗をうかがわせた、と見ることもできるかもしれない。

注

1. W. H. Gardner and N. H. Mackenzie, eds., *The Poems of Gerard Manley Hopkins*, 4th ed., (London: Oxford Univ. Press, 1967), pp. 196-97. Hopkins の詩の引用はすべてこの版より。詩の訳出にあたり、安田章一郎氏の『新版 G.M.ホプキンス研究』(清水弘文堂, 1983年)と安田章一郎、緒方登摩両氏訳の『ホプキンス詩集 新装第二版』(春秋社, 1994年)の中の訳を、参照させていただいた。
2. Alastair Fowler, ed., *John Milton Paradise Lost* (London: Longman, 1971). Milton の *Paradise Lost* からの引用は、すべてこの版より。
3. Peter Milward and Raymond V. Schoder, *Landscape and Inscape* (Michigan: William B. Eerdmans Publishin Company, 1975), p. 95; Norman H. Mackenzie, ed., *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins* (Oxford: Clarendon Press, 1990), p.477.
4. Christopher Devlin, ed., *The Sermon and Devotional Writings of Gerard Manley Hopkins* (London: Oxford Univ. Press, 1959), p. 170.
5. Norman H. Mackensie, ed., *The Later Poetic Manuscripts of Gerard Manley Hopkins* (New York: Garland Publishing, 1991), p.302.

6. "When Satan still in *gaze*, as first he stood,/ Scarce thus at length failed speech recovered sad. (iv, 356-57). (イタリック筆者)"
7. 平井正穂 訳, 『失楽園 上』(岩波文庫, 1981年), 181頁。以下 *PL* の和訳はこの訳による。
8. 金光仁三郎, 他訳, ジャン・シュバリエ/ アラン・ゲールブラン 『世界シンボル大事典』(東京 大修館, 1996年), 118頁。
9. 池田紘一 訳, マンフレート・ルルカー 『聖書象徴事典』(京都:人文書院, 2008年), 364頁。
10. Mackenzie, *Poetical Works*, p.193 (C)
11. 'there is one good but one, that is, God' (Mackenzie, *Poetical Works*, p.478,)
12. *PL*, iv, ll. 301-311.
13. 『世界シンボル大事典』, 241頁。
14. 『世界シンボル大事典』, 899頁。
15. *Landscape and Inscape*, p.92
16. Milward and Shoder は「情欲」(concupiscence) の罪 (コロサイ 3; 5) を見ている (*Landscape and Inscape*, p.91.)
17. ホブキンは彼の『霊的著作』中の「地獄」(平井正穂 訳, 上, 181頁) についての瞑想 [S, 241-244] の中で墮獄者にとっては「良心」(conscience) が「虫」(worm) だ, と述べた。この虫は「自分の最もみじめな己をかじり, それを餌にする精神」である。[*Sermon and Devotional Writings*, p. 243.] 彼は「地獄ではサタンは自分の共犯者, 犯罪の連れ合い, 彼の謀反の仲間を作る。彼らの首領の苦悩を分かっただけである。というのは彼らの良心という虫は, 首領は老いた蛇, 火の竜と呼ばれるので, 首領自身のものに比べると小さいものだからだ。」とも説明する。「虫」は墮獄者にとって良心の相関物である。'On the Portrait' では, 二人の若者たちの地獄に落ちる運命が予見されるが, ミルトンのサタンとは異なり, 「虫」は, 墮獄者を苦しめる良心であり, 一種の善性を有する。それには, 腐敗した世界を滅ぼす終末の火のような急速な波及力と破壊力とがある。

(経済学部教授・英文学)

